

はしがき

1980年代、リスクマネジメントは「ネス湖のネッシーのごとし」と言われた。スコットランドの湖に存在していると噂された怪獣のように、誰もが話題にするものの、具体的な全体像を誰も見たことがないという状況にあった。時は流れ、個人と組織を取り巻くリスクはますます複雑化、社会化、巨大化、国際化してきた。こうした中、社会的な要請に応える形で、リスクマネジメントや危機管理の考え方が普及し、企業における組織体制の整備に始まる具体的な実践も定着してきた。市民権を得たと言ってよいだろう。

リスクマネジメントは、保険を中心とするファイナンス的なアプローチと、安全工学的なアプローチの二つの流れが中心となって発達してきた。さらに、第三、第四の流れとして、経営学的なアプローチ、防災・減災科学的なアプローチが存在している。

本書は、経営学的なアプローチから、リスクマネジメントのごく基本的な考え方をまとめたリスクマネジメント総論書である。経営学的なアプローチから見たリスクマネジメントのトレンドには次に示すようなものがあるが、本書にはこれらを何らかの形で盛り込んだ。

- ・ リスクマネジメント委員会など、具体的な組織体制の構築。
- ・ ISO31000 など、リスクマネジメントに関する国際規格の参照。
- ・ 大規模災害を想定した BCP（事業継続計画）の策定。
- ・ CSR（企業の社会的責任）からのアプローチ。
- ・ 内部統制からのアプローチ。
- ・ 「モノ・カネ」だけでなく「ヒト・ココロ」も対象にしたリスクマネジメント。心の危機管理。
- ・ リスクマネジメントの観点からのワークライフ・バランスやメンタルヘルス・ケア。
- ・ 社会的なリスクに対して企業・行政・地域社会が連携して対応するソーシャル・リスク。マネジメントの考え方の実践。企業リスクマネジメントはソーシャル・リスクマネジメントの一角を担うという意識。
- ・ ソーシャル・リスクマネジメントの観点からの地域社会と企業の連携。

本書を構成するにあたり、これまでに発表した著作、特に『基本リスクマネジメント用語辞典』（同文館出版、2004年、亀井利明監修・上田和勇との共編著）、『経営者とリスクテイクング』（関西大学出版部、2005年）、『リスクマネジメント総論 増補版』（同文館出版、2009年、亀井利明との共著）の3冊の内容を活用すると共に、各専門分野の研究者の方々の著作を参照・引用させていただいた。『経営者とリスクテイクング』以降に行った調査に基づく事例を随所に盛り込んだほか、2005年夏から1年間のモンペリエ第一大学経営学部における在外研究に基づいて第14章と第15章を構成した。

昭和 30 年代に亀井利明名誉教授が、リスクマネジメント理論を日本に初めて紹介してから半世紀以上が経過した。同名誉教授が 1978 年に関西大学を本拠に日本リスクマネジメント学会を創設して 30 年以上が経過した。当初は、学界で異端視され、大変な苦勞をなされたと聞く。半世紀を経て、リスク管理や危機管理は、社会で最も注目される分野の一つとなった。

こうした現代社会の要請に応じて、2010 年 4 月、関西大学は、防災・減災、事故防止、危機管理を専門的・学際的に教育・研究する日本で初めての学部・大学院「社会安全学部」と「大学院社会安全研究科」を開設するに至った。副学長時に社会安全学部を構想された安部誠治教授（公共事業論）、防災・減災研究の世界的権威で現在学部長・研究科長の河田恵昭教授（防災・減災論、危機管理論）、副学部長・副研究科長で原子力プラントの安全性などの研究に従事されている小澤守教授（機械工学）、同じく副学部長・副研究科長でリスク研究学会の会長を務められた土田昭司教授（リスク社会心理学）をはじめとして、さまざまな学問分野で安全やリスクに関わる研究に従事する研究者が結集している。筆者もこの学部の末席に名を連ねさせていただき、異なる学問分野の同僚から、日々刺激を得て学ばせていただいている。学際的な社会安全学部・研究科が目標とする「社会安全学」が構築されていくことを期待したい。

まことに拙い内容ではあるが、大学におけるリスクマネジメント総論の副読本、研修や講座における参考書などとして、本書が何らかの参考になれば幸いである。本書執筆にあたっては、関西大学大学院社会安全研究科第 1 期生で、遊具の安全を中心に子育てのリスクマネジメントを研究されている松野敬子さん、ワークライフバランスとリスク情報の開示に関する修士論文を提出して関西大学大学院総合情報学研究科を今春修了する周鵬宇くんのお二人に大変お世話になった。感謝の意を表したい。出版助成を賜った学校法人関西大学と出版委員会の皆さま、関西大学出版部の皆さま、特に、前作『ワイン・ウォーズ：モンダヴィ事件』（2009 年）に引き続いて編集の労をとって下さった大橋佳子さんには、心より御礼申し上げたい。

浅学非才の筆者ゆえ、本書の内容において、未熟な点や誤りが多々あることと思う。読者の方々からのご指導を心より期待する次第である。

2011 年 3 月
亀井克之

本書出版は関西大学研究成果出版助成金規程によるものである。

本書は、文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）課題番号 21530373 による研究成果の一部である。